

THE FLAME TAKERS

L.ノーマン作
片山 厚訳
山下脩馬画



消えたメロディー

ライリス・ノーマン 作

片山 厚 訳

篠崎書林

THE FLAME TAKERS

(A)

【消えたメロディー】

定価 1100 円

昭和52年6月10日 初版印刷

昭和52年6月25日 初版発行

訳者 片山 厚 札幌市中央区北17条西14丁目
発行者 篠崎 政義 東京都千代田区神田錦町1の13
印刷者 三 秀 社 東京都千代田区内神田1-12-5

発行所 東京都千代田区 株式 篠崎書林
神田錦町1の13 会社

郵便番号 10.1

電話東京(291)1480・2107番 振替東京6-109182番

8097-330010-3020

乱丁・落丁・その他不完全本はお取り替えいたします。(検印廃止)



もくじ

11	燃えあがる黒い影	155
10	地下道の冒険	145
9	ヘイター先生にいらまれて	129
8	なぞの詩	114
7	グロッス氏と対面	93
6	うごめく影	79
5	マロリー家の混乱	63
4	歌を忘れたマーク	50
3	路地裏のグロッス氏	31
2	奇妙な少年	19
1	マークとジョアンナ	1



12

マークの口笛

くちがえ

167

訳者のことば

173

山下脩馬画

1 マークとジョアンナ

「マロリー君！」

マークはぎくつとした。あわてて、紙をノートの下にかくしながら、それでも、何気ない顔をして言った。

「はい、先生」

「なにをしていたのかね、マロリー君？」

「先生の出された数学の問題です」

マークは答えた。

「ここへ持って来たまえ」

マークは、ノートをつかんだ。これでは、どうやっても、五線紙をかくすことができなかった。仕方なしに、机の上にぼつんと置いたまま、教卓のところまで歩いて行くと、先生は、やりかけの問題をちらっと見てから、クラスのみんながじっと顔をふせているほうをにらみつけた。

「スチーブンソン君、マロリー君の机の上にあるものを、私のところへ持って来たまえ」

ピーター・スチーブンソンは、ゆっくり立ち上がって、マークの楽譜がくふを取り上げ、先生のところへ持って行った。すまなそうな顔をちょっとマークに向けたピーターは、それを先生に差し出した。ヘイター先生は、その紙を、いやらしい、きたないものでも取るように、指でつまんだと思うと、その声が、教室の中を、いっぺんにしんとさせてしまった。

「これはなんだね？」

「歌です。先生」

マークがぼそぼそと答えた。

「そんなことはわかってるよ、マロリー君。私はそんなばかりではないぞ。それとも、君たちは、みんな私をそう思っているのかね？」

そう言つて、先生はじろつとみんなの顔を見た。何人かが、お義理のように、くすくすと笑つた。「私にも、これが代数とどういふ関係にあるかだ。それとも、君にはこの才能はあつても、数学の才能は全然ないということかね？」

マークは黙だまつたままだった。

「さあ、返事はどうした？」

マークが顔を上げると、先生の視線にまともにぶつかった。黒い目がじつとにらんでいた。そうして、その奥おくで、冷たいものがきらりと光った。まるで蛇へびの舌したのように、きらりと光って消え

たのだ。マークは、一瞬くらつとして、思わず「そうです、先生」と言ってしまった。

「なるほど。では、その間違つた考えを改めなければならぬわけだ」

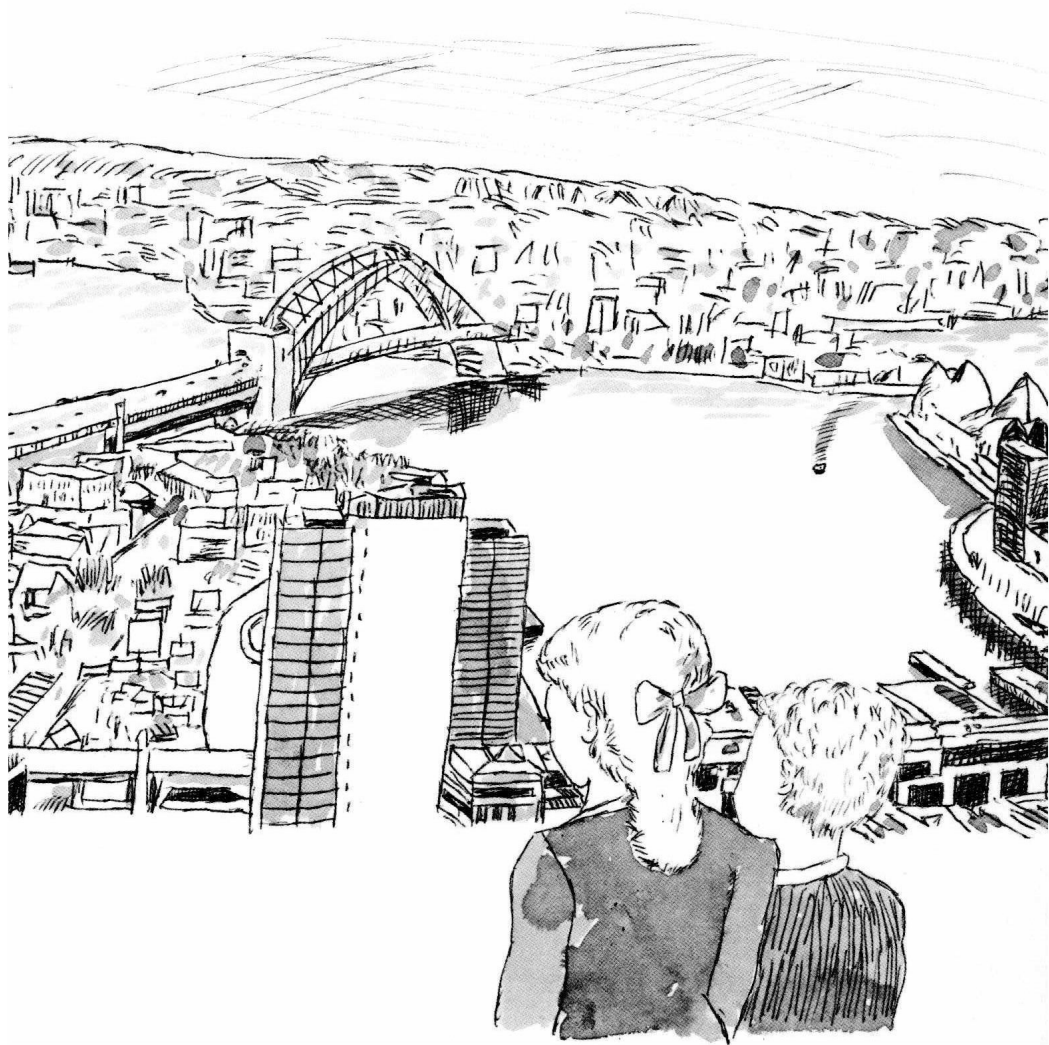
ヘイター先生は、ゆっくりと、五線紙を、一度、また一度と引きさいた。それから、小さく書いた紙片を、おもむろに、はらはらと紙くずかごの中へ落とした。

「さあ、席へもどりたまえ。だが、放課後三十分居残りだね。放り出してあつた方程式の問題をしばらくやってくれるだろうね」

マークは顔を真っ赤にして席へもどつた。二、三人の仲間が授業の中断をありがたがつて、こっそり笑つてみせた。ヘイターなんて嫌いさ、とマークは思った。そりゃあ歌なんか書いて遊んでいたかも知れないけれど、前の数学のアンダーソン先生だったら、こんな大騒ぎはしなかったのに。ひょっとしたら、あの歌を歌わせてくれたかもしれないんだ。するとそのとき、マークの背中をこっそりつくものがいた。なにかたくらんで、氣を引こうとする後ろの席のピーター・スチーブンソンだった。でも、マークは背を丸めて、相手にしなかった。(もし $3x + 2y$ が……)

あのヘドロのヘイターがぼくの歌を破ってしまったっていいさ。だって、もうぼくの頭の中にそっくりそのまま出来上がっているんだもの。もう一度書けばいいんだ。(…… $6x + 10$ に等しければ……)

居残りの時間がどうやらやつと終つて、ヘイター先生が、ちつとも氣の進まぬ様子で、それでもどうにか帰宅を許してくれたので、マークは家に急いだ。スクール・バスはとつくの昔になく



なっていた。仕方なくショールグランドの横を通り、それからオックスフォード街を横切って歩いて行くと、ちょうどそのとき、店先をのぞきながらやってくる姉のジョアンナにぶつかった。そこで、マークは、ヘイター先生や歌のことをみんな姉に話してやった。

「いやなやつね、鼻持ちならない豚^{ぶた}みたいね。垣^{かきね}根にくつつくワラジムシよ」
ジョアンナが同調した。

「がみがみやのヘイターさ。そのうち、ぐらぐら煮^にえ立つ噴^{ふん}火^か口^{こう}につっこんで——」
「べちゃべちゃにつぶしてしまふのよ」とジョアンナ。

「ぶつつぶうーせえーっ」とマークがジョアンナの言葉を繰^くり返し、片足^{かたあし}あげて、ワラジムシのヘイターを歩道にふみつけた。

「ともかくね」とマークが言った。「破くんなら勝手に破けばいいんだ。破いたって、歌はいつもここに入っているんだから」と言って、頭を叩^{たた}いた。「ここからうばうことはできないさ」

「そこに入っているものがあってよかったわ。どうかしらって思っていたのよ」
ジョアンナがからかった。

「へっ、へっへ。確かめたかったら、ついておいでよ」

二人は家の前まで来ていた。マークは、さっとジョアンナの前へ出て、間をすりぬけ、玄関^{げんかん}のドアをノックした。

家は、短かい、急な坂道にある、古い、三階^{がいだて}建のテラス造りだった。その道路にそって、氷の



滝のように見えるテラスが続いていた。駐車してある車は、道路のふちに鼻をつっこんで、しっかりと、坂をすべり落ちないようにしていた。道路の中央と歩道に沿って、春の新緑に染まった街路樹の枝が、アスファルトの上に、二つのアーチ型の影をまだらに描いていた。マロリーの家は並びのいちばん端にあった。片側には、七軒の同じ家が、一段一段高く、坂道の上に続き、もう一方の側には、細い道路があつて、これにせまい小路がつながり、家の後ろのほうにかくれていた。なんとか駐車の見つけようとして、身をよじるように車を動かすのはここだった。ごみのかんを出して置くのもこの場所だ。そうして、野良猫が、こっそりと、人目に立たずに住んでいて、やかましい耳障りな声をあげて密会するのもここだった。

家の道路側には、窓^{まど}もなにも無かった。マークがまだ小さかったころ、テラスハウスというのは、細長いものを短かく切って買うのだとばかり思っていた。欲しい番号を選んで、それを、どこまでも続いている、同じような長いものから切り離^{はな}して、後から、切り口を大きなコテで平らにならすものだ、と思っていた。

家は白くぬられていた。小さいタイル張りの一階^{かい}のベランダ、二階にはバルコニーがあつて、手すりが鉄細工^{てつさいく}で飾^{かざ}られていた。三階は褐色^{かつ}のスレート屋根があつて、バルコニーの背後^{はいご}へと傾斜^{けいせ}していた。この三階のマークとジョアンナの部屋からは、赤や、青や、茶色の屋根が見え、樹木のこずえや、公園とか運動場がきらきらと緑色に光っているその先に、はるかに遠く、青い港も見えるのだった。

マークはいらいしながら、もう一度ノッカーを鳴らした。

「ドアを叩^{たた}いたらしいのに」とジョアンナが言った。

「いないんだよ、きつと」

「ご明察よ、若いシャロック・ホームズさん」

ジョアンナは、ポケットの財布から鍵^{かぎ}を取り出して、「ごめんなさい」と言っただかと思つたと、マークの前に割^わり込んで、ドアを開けた。長い廊下^{ろうか}はひんやりとして、暗かった。左手の開いたドアが居間へ続き、ずっと奥^{おく}に、二階へ上る急な階段があつた。ジョアンナの後ろから入ったマークは、階段の下にどさつとカバンを投げ出した。

「おなかがすいたあ」と台所へまっしぐら。

「あら、いつもじゃない」

聞こえないふりをして、奥までかけていったマークは、二段ほど低くなっている台所へ入って行った。

「メモがあるよ」

マークの大きな声がした。

「なんて書いてあるの」

「なーんだ」

「なーんだってなあに？」

戸口まで来たジョアンナが聞いた。

「あのね」

マークがメモを読み上げた。

「ヘンチューを温めて食事。お勉強。その後、劇場げきじょうへタクシーで。お芝居しばいあり。シーラ、だつて。なーんだでしょう。これじゃあ、今晚歌こんばんを書いてしまえないじゃない。シーラ・オシェイおばあさんにまたやられたんだ」

「いいじゃない。みんな頭に入っているって言ったのあんたじゃない」

ジョアンナは、指を頭のところでパチンとならした。

「氣をつけて」

なべのふたを取って、おそろおそろ中をのぞきながら、マークは、「大切な品物をだめにしないようにね」と言った。

「シーラおばあさん特製って感じ——氣違^{きちが}いライス・ブディングっていうんだな、これは」

「どうしてシチューがライス・ブディングに見えて——氣違^{きちが}いでもなんでもよ」

「シーラおばあさんだけが知っているのさ。でも、ぼくは欲しくないや」

マークは、さっさとパンを取り出して、勝手にサンドイッチを作り始めた。

「そんな、いたずら小僧^{こぞう}のちび悪魔^{あくま}みたいに、ひどいこと言うと、舌がまがってしまふわよ」
アイルランド訛^{なま}りで叫^こんだジョアンナは、身ぶるいすると、あらためて、「宿題はたくさんあるの？」とマークを見た。

「そんなにないんだ。ほとんど暗記するものばかりさ。朝早く起きてやればいいんだ」

「いいわね。私は作文があるの。でも、できなくても、多分、ママが先生に手紙を書いてくれるわ、きっと」

「そんなこと言って。ママはいつも言っているじゃあない。しっかり勉強して、いいお仕事につかなくてはいけませんよ。ママのように、あちこち、ばたばたと移り歩いて、落着いた生活ができないような子供にはなって欲しくないのよってさ」

マークは、顔をしかめて見せた。

「なにを言うの。ママは女優じょゆうさんが本当に好きだって、知っているくせに」

「そうさ。ぼくも知ってる。お姉さんも知ってる。ママも知ってる。それでも、ママはいつもそう言うのさ」

「あのね」とちょっと考えてから、ジョアンナが言った。「シーラおばあさんが私たちに劇場に来るようにと言っているのを、ママはきっと知らないのよ」

「うん」

マークは、サンドイッチをほおぼりながら、ミルクをついで、「たぶんね」と言った。

ジョアンナは、手を伸ばして、サンドイッチを半分取ると、一口かじってから、パンのふちをめくって、中をのぞいた。

「おいしいわ。中はなに？」

「ブラックベリー・ジャムとコールド・ラム。それに、ゆで玉子とレタスさ」

「ふーん」

最初のを食べ終ったジョアンナは、もう一切れに手を出して、言った。

「ねえ、さっさと仕事にかかりましょうよ。私が最初にシャワーに入るわ。それから、三十分で、立派で、あざやかな、気の利いた、才能あふれる作文っていうのをさっさと片付けかたづけるから、その間にあんたがシャワーに入って、シーラおばあさんのごたごたポタージュを温めてちょうだい」

「パパのお芝居がへマクベスでなくて残念だな。シーラおばあさんのシチューなら、魔女のこしらえるのにちょうどぴったりだもの」マークは体を縮めて、しわくちゃな顔になって言った。

「重なれ、重なれ、苦勞も悩みも！」

「じゃあね。いつまでも遊んでちゃあだめよ。サンドイッチどうも」

「礼にはおよばぬ」とマークは悲しい声を出し、それから胸を張って言った。「現代最高の少年俳優ここにあり。われこそは十三才にして、ヨーロッパ全土のなみいる諸候の面前で、へマクベスを演じたるただ一人のもの」と、そこでちよつと間を置いてから、また続けた。「しかも、なんたるあわれな観客よ……されど、かえりみられず、ほめられず、やじられもせず、ここにあるひとり舞台の上にある、この傷心の姿よ」と、冷蔵庫にふかぶかと頭をさげても、反応なし。「いやはや」とマークは、パンくずをはらい、テーブルの上を片付けると、シチューの用意で、ナイフにフォークと皿を並べ、台所の戸口に立ち止まり、きどってあたりを眺め回した。

「いざ行かん。君が美しきシャワーに、わが悲しみを静めんか」

マークは、はしゃいで、二階へ駆け上がった。

シャワーを浴び、気ののらない宿題にすこし手をつけてから、二人は急いでシチューを食べた。最後の一口をおなかの中へむりやり流しこむようにして、マークが言った。「シーラおばあさんの料理がひどいのは、きっと、おばあさんの過去のせいだと思うね」

「いつも旅回りだから、それで、親のそばにいて、女のたしなみを覚える機会が無かったとい

うこと？」

「それもあるよ。でも、いつも宿屋とか芝居小屋にとまってさ。おばあさんの話、知っているだろう。そんなところの食物が骨にしみてしまつて、こんな風にしか料理ができないのさ。自分じゃあ自分の料理が好きなんだものね」

「そうかもね」

ジョアンナは、じゃ口の水でお皿をすすぎ、さつと布巾でふいてから、言った。

「片付けているうちに、タクシーを呼んでくれない」

マークは、電話をかけてから、玄関のところに立っていた。ジョアンナが出て来ると、タクシーの着くのは同じだった。

「オクタゴン劇場まで」

乗りながら、マークが言った。

「オクタゴンだね」

運転手は、にっこり笑うと、しばらく黙つて車を走らせてから、「劇場じゃあ、なにがあるんだね？」と聞いた。

「今晚はなにもないのよ。木、金、土の三日だけなの。ヘマタ・ハリ▽っていう、第一次大戦のパロディーみたいなのやっているのよ」

「なるほど」